

夕マ姉が春更ママに
○○○○を蹴っつてくださ
と哀願しちゃう本。

18歳以上、かつ
冗談の分かる成人向け同人誌。



「あの、春夏さん お願いがあってですけど…」
 「一晩中、汗と愛液と精液にまみれながら愛し合った夜明け、私はすっと抱いていた想いを打ち明けるところに…」
 「どうしたの、思いつめた顔して」
 春夏さんは、いつもとおりの柔和な微笑みで私を見つめる。
 「あの…実は…私のキンタマ、蹴ってくれませんか？」
 「は？ 蹴る？ キック？ な、なんで？」
 「あ、あの、実は…毎日春夏さんにチンポを愛してもらっているうちに、だんだん…もっともっと強く愛されたくなくなってきて…そんなとき、昔のことを思い出したんです」
 「昔のこと？」
 「タカ坊たちと一緒に公園で遊んでいた子供の頃です。ある日変質者が現われて、チンポを見せつけてきたんですけど、別に珍しくも無かったし…ちょっと好奇心が高くて…」
 「その変質者の男のタマを蹴ったのね」
 「はい、思いつきの。そしたら変質者は私のすいしを上げて倒れてしまったんですけど、私の足にも今まで感じたことがない感触が残ってしまってた…以来、たまにそれを思い出すと、なんだか変な気持ちになってたんです」
 「…自分も体験してみたい、と…」
 「誰でもいいわけじゃないんです！ 春夏さんに股間を蹴られる…そう思うと急にキンタマが疼き出して、チンポも、ああ…ほら…こんなに…」
 「ダメや」
 「お願いします！ とんなに痛くても、つぶれても後悔しませんし、恨んだりしません！ キンタマを蹴ってもらえるなら何でもします！」
 「何でも…そう。じゃあ『ガマン』なさい」
 「う…」
 「1ヶ月だけね」
 「え？」
 「そこで春夏さんはこわばっていた表情を、ようやく緩めてくれた。
 「あなた、私の足のこと、何も知らないでしょ」
 「えっと…」
 「長さ、硬さ、重さ、癖、味、色、ニオイ…知ってる？」
 「知らない—— 顔やオッパイ、腕やお腹、おまんこやチンポ…普段、目にして手で触れる場所は何も目をつぶってても分かるけど、足の事ってよく知らない…」

「だから、一ヶ月、私の足のことをしっ
かりと見て、触れて、舐めて、愛して
理解しなさい。何も知らない足で蹴るな
んで、鉄パイプでキンタマぶっ殴るのと
変わりはしないわ。蹴るほうだって気持
ちよくないわよ。そうでしょ？」
「は……はい……」
確かにそうだ……。私は心の底から春夏
さんに感心すると同時に、改めて惚れ直
してしまった。

* * *

「おかえりなさい、ママ」
「ただいま」

そうして、春夏さんとの新しい暮らし
が始まった。私は、彼女が外出から帰っ
てきたり、家事を終わらせると、進んで
足をケアした。

撫でて、揉んで、洗って、暖めて、文
字通り私の全身を使って彼女の足を感じ
とった。

「どうですか、チンポ汁をローションに
してみました？」

「素敵よ。ただでさえ、たまきちゃんのバ
イブリは気持ちいいのに……チンポ汁のヌ
ルヌル感と暖かさ、そしてキンタマとチ
ンカスの二オイが疲れをとってくれるわね」
「あは、嬉しい……」

思わず胸がドキドキしてへる。その胸の
鼓動はこの足に伝わっているだろう。なぜ
ならこの胸の奥まで、春夏さんの足の温も
りが伝わっているのだから。

「たまきちゃん……これ、クセになりそうよ」
「ふふ、なつてください。胸だけじゃなく
て、お尻にもお腹にも顔にも、どこでも
足を置いてくつろいでください。私もそ
れが嬉しいんです……」

「ホントね。私の足は力が入らなくなると
らしいラックスしちゃってるのよ」。たま
きちゃんのチンポはすく動いてる
「あん……ママのチンポだってすく動いてる
ないですか。キンタマもぶっ殴りくらん
で……精液がたっぷり溜まってる」
私たちは見詰め合うとクスクス笑って
どちからかともなく、抱き合った。



2週間が経った。

私は、もうママの足で顔を撫でられるた
けて射精するプタになっていた。
「似合うわよ。たまき」

「おねだりして買ってもらったお気に入りの
鼻フックを着けて、胸いっぱいママの
ニオイを嗅いで、隅々まで舐めたりほお擦
りして味わえる幸福に涙が出る。

「踏むわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
「はっ！踏んで…プタたまきの顔を…踏ん
でください…あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
床に寝転がった私の顔を、優しく踏むマ
マ。屈辱感はなく、更なる幸福感が私を満
たす。なぜなら、この2週間、私はママの
足のことをたくさん知ったから。

形やニオイや味だけじゃない。ママが小
さかった頃、足を怪我したこと、かっこ
が早かったこと、学生時代は足の太さがコ
ンプレックスだったこと、色々とお話を重
ねながら、その足を身体で感じることが
出来た。そこには、もう、愛しかなかった。
「ねえ…来て…たまき…」

鼻を舐らしてママを犯す。足にしゃぶる
つきながら。そこには幸せを感じるもう
一つの理由があった。

「ああ、たまき…！…もっど、もっ
どとチンポおっ！…キントマ汁出してっ！
プタチンポで犯してええっ！」

そう、最近ママのほつから私を求める
ようになってくれた。ママの身体、そして
足も私なしではいられなくなっていた。

「ねえ、たまき…！…もっど、舐めてっ！
ニオイ…かいでっ、今日は、洗っていないか
ら…！汗とまんこ汁とおしっことウンコ
とチンポ汁、いっぱい踏んでまぶして濡ら
してきたのっ！臭いでしょっ？汚いで
しょっ？美味しいでしょっ？好きてでしょっ？

「じゃあ…！…あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…！
んちゅ…んっ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ、チ
ンポイクっ！臭くて汚いママの足を舐め
てるだけで…んっっっっっっっっっっっ！ひくっ
っ！プタチンポっ、キントマいグうう
…っ…あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

「わたしもっ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ、プタた
まきに中出しされてっ…っっっっっっっっっっっ！

「はっ！踏んでっ…プタたまきの顔を…踏ん
でください…あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
床に寝転がった私の顔を、優しく踏むマ
マ。屈辱感はなく、更なる幸福感が私を満
たす。なぜなら、この2週間、私はママの
足のことをたくさん知ったから。





3週間が経過したある日。ママはようやく私のキンタマを愛してくれた。
「あっ……うあ……おおお……」
「うう、16Vの動きまでも……」
「痛いんじゃない?」
「おっ、おほっ……んほおっ!」
まだ蹴られているわけではない。私はママの足にまたがっているだけ。ママは軽くトントントンと、とヒザをあげてリズムカルに股間を押し上げる。キスで言うならフレンチキスマたいなもの。だけと
「ヒュッ、あっ、イクッ、イクッ……」
「ヒュクッ! ヒュクッ! ヒュクッ! ヒュクッ!」
私のチンポはその動きに合わせて射精した。この3週間の調教で熟れきった果実と化したキンタマが狂喜している。袋の中で精子が暴れまくっている。
止まらない。気持ちいい。だけど、それ以上!
「いたいよあ……、おっ、あおおっ、ききも
「ヒュッ……! いたいけどお……あきっ、んきひい
「う! いたい……ああん、キンタマあ……
「つぶれちゃうううっ! あっ、あっ、が
「らめっ、もっ、もっ、もっ……あ、あ、あ、
「んふ、たまきつたら自分で腰を振ってる
の気づいてないのね」
「へひっ…… あっ、やっ……わたし、腰振っ
てるうっ! 痛いの……、気持ちいいの
に……、イッちゃうの……、いい……! あ
「ア、あおおお……! いっ、また……
イクううう……」

私は、あやうく大変な過ちを犯そうとしていたことに気づいていた。
3週間前、もしあの時にキンタマを思い切り蹴りどばされていたら……この程度の刺激でも予想以上の痛みがあるのだから、きつと、その場で快樂など感ぜられず悶絶していたら、好奇心を愛たと勘違いしたことの後悔し、そして、二度とキンタマを蹴って欲しいなんて思わなくなっていたに違いない。
「そうならば、私はこの甘い痛みと快樂を一生知ることが無かった。ママの思い出話や身体のこと知らず、ママに「踏む悦び」を与えることも出来なかった。
そして、きつこのあとに体験するであろう「ナイフキス」も……」

「一ヶ月が経った約束の日。この日のために毎日毎日、ずっとママの足を感し、畏れ、愛してきた。ある程度キンタマへの刺激には慣れてきたものの、思い切り蹴り飛ばされるのは初めて。期待と恐怖が交じり合い、私のキンタマは今までに無いほど硬く大きく勃起していた。」

「いくわよ、たまき」

「はい……よろしく、お願いします……うんうん、愛しい足が、ゆっくりと私のキンタマを踏みつけていく。肌と肌が密着し、溶け合っていく……体感。ああ、来る……来る……来る……」

「ああ、おっ、んおお……来た……来た……あああああ……」

「ひぎ……あ、踏まれてる……あ、あ、あ……」

「ああ……キンタマぶくろっ……あああああ……」

「すこ……素敵いいっ……」

「ゆっくりと、しかし確実に、ママの足が私の膨れ上がった睾丸に力を加え押しつぶしていく。痛い、痛い、痛い。でも、たまらないほど、気持ちいい……っ！」

「まだまだ……ほら、これは……っ！」

「グリッ、グリグリグリ……っ！」

「ギヤアアア…… おあ、あき……いいっ！んぎ、あ、アギアアア……」

「ねじこまれる…… 押さえつけるだけではなく、ママの足が私の肉球を踏みじり、すり潰そうとしている……っ！」

「つぶれる……っ！ あっあおっ！ いたいっ！ いたいっ！ ああ……っ！ らめえっ！ 破れるっ！ 壊れるっ！ 死ぬっ！ しんちゃう……っ！ ああ……っ！」

「セクスリしながら死ぬの？ 射精しながら死んじゃうの？ ためよ。もっと、もっと狂わせてあげるんだから……」

「ひぎ……い……あ……」

「痛みが消えた。ママが足を離れたのだ。だけどそれは終わりを意味するわけじゃない。分かる。私には一瞬で理解できた。そして、嗚呼……私は脚を開いた股間を突き出して、それがくるのを待った。期待した。否、哀願した。」

「まあ……来て……思い切り……踏んでえ……っ」

「チンポ、わたしの……メソブタマソチンポ、ド変態女のキンタマ踏み潰してえええっ！」

「ええ、分かっているわ……えいっ！」

「グシヤアア……」

「あキヤアア……ッ……ッ……ッ……」





痛みも悦びも一瞬だけだった。悶絶するヒマすらも与えられず、ママの足が二倍近くに腫れ上がった私のキントマを休み無く蹴り上げる。

「あきやっ！ きゃっ！ んえっ、おげっ！ こほっ、んげっえっ！ あげえっ！ ぎゃああぁっ！ ひぎゃああーっ！」
股間から、腰から、背髄から、脳みそから粉々になった感覚が吹き飛んでいく。バラバラになった痛み。粉々になった快楽、すり潰された痺れ、叩き壊された恐怖、汚物と一緒にぶちまけられる愛。

「グロ吐いておしこもクソ」漏らして…ふふ、ひといい顔して「可愛いわよ、たまき」身体感覚が無い。感情も無い。ただ春夏さんにキントマを蹴られている、という客観的な現実だけが突き抜けていく。四散した感覚の中では、それを言葉で表現することも出来ない。飾ることも誇張することも誤魔化することも出来ない。純粹に、事実だけが私を突き上げる。

グチャッ、グチャッ、ぐちゃっ！ グチャッ！ グチャァァァッ！
「おおあーっ！ あが、けぶっ、おげええっ！ はが…っ、んぎ…っ！ フハッ、ヒフッ！ フリフリフリッ！ フんごおおっ！ ああぁっ、げっぶあっ！ あへ…ええっ！ 出てるあああっ！ ひぎ…いっ！ あきやああーっ！」
「イッてるわよ、たまきっ！ あなた、グロやウンコだけじゃなくて、ちゃんと精液をぶちまけながら、腰を振って、マソプタらしくキントマ蹴られてイッてるわよ！」
「あああっ！ 変態だよおっ！ わたひっ、壊れたっ、狂ったっ、おかしくなったあああっ！ ひぐ…っ、イクっ、おおああーっ！」

「そうよっ、あの公園の変質者何とも変わらな…いいえ、あんな男よりももっともっとと下変態になったのよ、あなたはっ！」
「あああああーっ！ そっけすうっ！ わたし、もう、一生、キントマ蹴りたいよおっ！ んおおおおっ！ あきやああーっ！」
「いいわよ、すっけすめへっ！ あげる。私も…もう辞められない…死ぬまで蹴り続けてあげるわ、たまき」

「ん……あ……」
 「ひんやりとした感覚で私は目を覚ました。
 「おはよう、たまきちゃん。大丈夫？」
 「春夏……さん……あ……ん……う……」
 「まだ動いちゃダメよ、腫れが引いてないんだから。しばらくこのまま寝てなさい」
 どうやら気を失っていたようだった。意識と感覚が戻ってきて、状況を理解する。
 「あ……春夏さん……」
 「痛い？」
 「うん……気持ち……いいです……も……も……」
 「さっき感じた心地よい冷たさの正体は、春夏さんの陰囊だった。巨大なまでに腫れ上がり肥大した私のキンタマにぴったりくっついて、熱を冷ましてくれていた。」
 「……後悔……」
 「いえ、全然……。一ヶ月かけて調教してくださったおかげです……。気持ちよかったですか……痛かったとか……ひと言じゃ言い表せないです……素敵な感覚を体験できました。もうこれ無しでは生きられない気がします……」
 「あはは、私もよ。たまきちゃんのキンタマ蹴りながら私も射精してた。たまきちゃんのこと、全部知ってた気になっていただけ、あんな顔、あんな声、あんな感触……初めて知ったわ。嬉しくて、でもちよっと辛くて……私もひと言じゃ言い表せないな。ただ……素敵な経験だったわ。ありがとう」
 「春夏さん……」
 「ごさいます。その……これからもうよろしくお願ひしますっ！」
 「うん、うん……」
 「うん、うん……あなたのクソ穴に足を突っ込んでウンコかき回して犯した後、それをマ……ンコにつっこんで子宮まで足で犯しちゃうかもしれないわよ？」
 「あ……ほんと……ですか……？ ホントにしてくれるんですか……？ あっ、痛……」
 想像しただけで、チンポが勃起し始める。キンタマも再び熱を持って疼き始める。
 「あははは、たまきちゃん、ホントにマ……ンコね。大丈夫よ、約束する。だけ……その前に、私からもお願いがあるの」
 「は、はい。なんでも聞きますっ」
 「あのね……今度は、私のキンタマ、あなたに蹴……って欲しいのよ」



「え？ ええええっ？」
 「あなたを調教してた」の一ヶ月、少しずつ私の心もマ……ンコに染まっていたのね。今日、確信できた。私、あなたの姿に憧れてしまったの」
 「春夏さん……」
 「お願い。今度は私のキンタマを調教して、蹴り飛ばして踏みにして……ケロとかウンコとかぶちまけながらイキまくる変態マ……ンコにして……」
 「私でいいんですか……春夏さん」
 「あなたじゃないとダメなの。それと……春夏……って呼んで……」
 そう言うと、恥ずかしそうに頬を染めた春夏さん……いいえ、私だけのキンタマメス奴隷は、シ……ツの中にもぐりこんで、優しく、甘く、私のキンタマにキスをした。

(おしまい)

【奥付】

発行：我流痴帯

著者：TANA

2008年08月17日発行

e-mail: garyuh@tana00.sakura.ne.jp

URL: http://tana00.sakura.ne.jp

印刷：しまや出版

※18歳未満の方の購読・閲覧を禁じます。

※この本の内容を無断で転載・複製・WEB等で配布することを禁じます。